

第1回中播磨新地域ビジョン検討委員会 議事録

1. 日 時：令和2年8月27日（木） 14時～16時10分
2. 場 所：姫路職員福利センター大会議室
3. 出席者
委 員：飯塚委員、石田委員、井関委員、宇高委員、浦上委員、小野委員、佐藤委員
玉田委員、内藤委員、藤本委員、藤原委員、三村委員、宮崎委員、吉田委員
代理出席：上西参事（岡田委員の代理）
県 側：小橋センター長、大久保副センター長兼県民交流室長、西村県民交流室次長
4. 内 容
 - (1) 中播磨県民センター長 挨拶（省略）
 - (2) 検討委員会委員長・副委員長の選任について
委員長は宇高委員、副委員長は井関委員に決定
 - (3) 中播磨新地域ビジョンの策定趣旨と検討の進め方について
資料1～資料2をもとに事務局から説明
 - (4) 部会委員・部会長の選任について
委員長より、各委員が所属する部会及び部会長を指名（資料のとおり）
 - (5) 中播磨地域の現状等について
資料3～資料5をもとに事務局から説明
 - (6) 意見交換
資料6をもとに意見交換を実施
主な発言は以下のとおり

（委員）

意見交換だが、資料6に今日の論点を整理していただいている。

中播磨地域の魅力と課題について意見をいただきたいということと、このビジョンの方向性について意見を交換していければと思う。

各市町からお越しいただいている委員には資料を準備いただいているので、総合計画などについても、ご説明いただきたい。

（委員）

観光資源も旅館も多々あるが、田んぼ・畑といった田舎は地域の資源だと思う。飲食店や旅館に直接お米を納めているが、今回のコロナでは、多くの飲食店等が打撃を受けている。このような時だからこそ、人と人の繋がりがすごく大事になってくる。食べ物は、例えばクックパッドをみると、ある程度のものは作れる時代になってきていると思う。商品や物というのは、一定のレベルは満たされている、もしくはできる時代になってきているので、その次の段階となると人と人。中播磨の人対人という繋がりがこれから大事になってくるのではないかと思う。

課題としては、夢前町もそうだが、周りを見渡すと高齢者が多く、兵庫県は農業の平均年齢が68歳、稲作農家になると71歳だったと思う。農業だけではなく、外に出ていっ

てしまった人が夢前町も多いなと感じる。リモートワークや田舎の魅力などは、今ちょうど発信していくと一番伝わりやすく、魅力になるのではないかと思う。

(委員)

兵庫県は全国の縮図であるとよく言われているが、中播磨地域は兵庫県の縮図であると感じている。特別養護老人ホームや介護保険の事業は別に福祉系の計画があるので、その計画に沿って事業を進めていく仕組みになっている。そのような中で、人材が集まらないため、最近特に姫路の周辺で特別養護老人ホームの整備がなかなか進まない。

人口減の話があったが、介護、福祉、医療の人材が、育ってこない、職業として選ばれない状況になっている。そのような状況で、各法人も手を挙げて、介護や福祉の事業をやっていく雰囲気になっていないので、厳しい状況が続いている。

外国人についても、相当数の雇用を予定している。特に去年あたりから、各施設に何人かずつ入っているが、今年はほとんどいない。介護の人材は定着しにくく、また外国人も期限が決められているので、これからも大変だなというのが現状である。

30年先を見越してというのは難しいところではあるが、直近5年10年ということであれば、働き方改革もあるので勤め方をいろいろと模索しながら、様々な人材を上手く活用していくことを検討している状況ではないかと思う。

良いのか悪いのか、中播磨地域の魅力は、平均をとったような地域であることかと思う。上手く平均をとって事業を展開しているように感じる。

(委員)

中播磨地域の魅力は自然が豊かであること。生野から播磨灘にそそぐ市川やその周辺の歴史文化、偉人も多く輩出していることも1つの魅力だと思う。このコロナ禍によって、生活様式が変わると言われているので、これから田舎が注目され、また空き家の活用も増えると思う。

資料4のヒアリングは的を射ていると思う。中播磨が抱える問題としては人口減少、少子高齢化があるが、少子高齢化は耕作放棄地の活用などで、農業に対してはビジネスチャンスに繋がるのではないかと考えている。悪いこともあるが、ピンチをチャンスに変えるような取り組みができれば良いと思う。

行政サービスでは、コンパクトなまちづくりが重要。都市化の部分と過疎化の部分、どちらを選択するか、多様性ということでニッチな部分も取り上げると、広がっていくのではないかと思う。

今回の新ビジョン策定にあたり大切にすべき点は、地域のリーダーの育成に必要となる教育だと思う。「チャレンジする」「失敗を恐れない」「失敗が悪いことではない」と、チャレンジする人に勇気を与えるような教育をしてもらいたいと思う。

(委員)

坊勢漁業協同組合の1人あたりの水揚げ高は約1千万円だが、実際の手取額は新卒のサラリーマンの収入にも満たないような所得になってしまうため、漁業に魅力を感じない人が増え、組合員が減少している。親も子どもに漁業を継がせたくないという思いから、大学進学等で島外への流出が続いている。島の人口も以前は約3300人いたが、今は2000人を切っており、高齢化率も増加している。

漁業を復活させようと、魚のおいしさを知ってもらうため、レストランや土産物、鮮魚・

活魚の販売をすることで魚のおいしさを届けたいと思っている。また、国・県・市の協力のもと体験見学船を作り、子どもたちを中心に漁業や海のことを学習してもらうことで、徐々に島に人を呼び込み、最終的には漁協組合員の家をそのまま民宿にできないかと考えている。漁業だけでは食べることができないので、民宿を兼業するなど収入を得て、島を復活させたいという気持ちを持っているが、組合員の理解がなかなか得られない。成功例が増え、フォロワーが増えるよう、引き続き取り組んでいく。

ビジョンについては、中播磨地域全体を見通して、観光の要素を産業に結びつけられないかと考えている。姫路市には多くの人があるが、ほとんど日帰りですべて帰ってしまうため、中播磨全体で何泊か滞在してもらえようというプランができないかと思う。

(委員)

中播磨地域には姫新線・播但線が通っている。兵庫県全体で考えた時、福知山線を省いて南北をつなぐ中で、加古川線はなかなか便数も保てておらず、今後は播但線とそして姫新線の二本の軸と東西の私鉄も含み、大きな枠組みを考える時期が来ていると思う。やはりこれらの鉄道は中播磨の大きな魅力である。

また、海へ繋がる川筋文化も中播磨の大きな魅力の1つ。

それと災害がない地域とよく言われるが、暮らしそのものが非常に安定していると思う。安定しているということは魅力を感じにくい地域でもあり、特別なものが際立っている地域でもないということ。これはもしかしたら今後30年先のことを考えると、非常に先を行っている地域ではないかと逆に考えている。

中播磨地域にとって、北向きの方向性をどうとらえていくかというのは大きな課題だと思う。中播磨は但馬との繋がりが強かったが、和田山から舞鶴道に繋がる道路が非常に安く走れるため、但馬の人がほとんど姫路を経由しなくなり、これが姫路と但馬の繋がりを非常に薄くしてきている。これまで北から南への労働力の確保が続いてきたので、但馬との繋がりの問題はこれからの中播磨の大きなテーマになるのではないかと思う。

また、自然が豊かといった意見もあるが、私は逆に、人工林が今後30年間で、非常に大きな問題になってくると思う。人工的に植えられた山の放置の状態や地権者の問題などが、これから大きな問題に発展してくると思う。

(委員)

播磨は全国有数の工業地帯であり、それは強みであるが、その裏側には弱みが潜んでいる。実際に、兵庫県は精密なものを作る最先端の加工が非常に弱い地域であると思う。最先端の加工技術を磨き、航空宇宙分野などこれまで兵庫になかった仕事を播磨に引き付けたいと考えている。兵庫県にはすごく良い施設が結構あるが、それらを上手く活用できなかったり、活用する気がなかったりするるので、どうやって繋いでいくかが課題である。

中播磨地域の魅力はたくさんあるが、一番人気は家島。家島に行った人は必ずリピーターになる。割とアクセスも良いので、学生のゼミ合宿で活用すると面白いのではないか。

課題はこの地域が中途半端に恵まれていること。チャレンジしなくても何とかなるため、将来は困ることになると思う。ヨーロッパでは田舎でも世界に通用するおしゃれな鉄工所などがたくさんあり、そういう要素も少し取り入れると面白いと思う。きれいな川、空、森があるだけではダメ。田舎に企業を立地させるのではなく、そこへ自分たちが出てきたいと思わせるような仕組みを作ることが大事だと思う。

(委員)

中播磨地域の魅力は、第2次産業のウエイトが非常に高いところ。姫路城に隠れがちではあるが、実際は非常に全国でも有数の産業立地のまちである。ただ、若者が就職というところと東京・大阪に出てしまい、人口流出が激しいのも否めないところである。

若者が出て行ってもいいが、子どもが小学校に入るタイミングでこっちに帰ってきてもらって、子どもは姫路で育てたい、あるいは神河・市川・福崎といった自然豊かなところで住みたい、という女性をどう増やしていくか。決定権は女性にあるので、女性に焦点をあてることも必要ではないかと感じている。

抱える課題だが、全国のいろんな事例を見ると、「この地域は山があって、川があって、海があってとても自然豊かなきれいな町です」とパンフレットに書いてあるが、町名を隠すとどこでも一緒になる。その中からどうやって選ばれるまちになるかということは、非常にポイントになってくると思う。中播磨という名前を消しても中播磨だとわかる特色を皆さんとどう打ち出していくか、検討委員会のテーマだと思っている。

観光も転換期を迎えていて、少し前まではオーバーツーリズムという問題もあったが、コロナ禍で一旦立ち止まって自分たちはどう観光客を受け入れるべきなのかを考える時間が与えられた。このアフターコロナの時に選ばれる観光地になるには住民の力が欠かせないので、各市町では、住民にどう観光に関わってもらえるかということを中心に取組もうとしている。中播磨でも、住民が安心して観光客を迎えられるような基盤整備も必要になってくると思う。

(委員)

播磨の強みは人が非常に穏やかであること。そのため、何か問題提起をしても、「そこまでしなくても今のままで十分です」という感じが脈々と続いている。

また、家庭の中で女性の発言力は強くなっているが、村の中での発言力はまだ弱い。そのジレンマが、女性が田舎に住むことに抵抗を覚える原因であると思う。それが子どもの教育に繋がり、子どもは高等学校を卒業すると村の外へ出て行くことが普通になる。女性の活動の場を増やすことで、女性や若者が中心となった村活動の盛り上がりにつながり、それがこれからの村づくりの原点になると思う。

30年後の観光はもっと違ってくる。観光客が観光地に溶け込み、気兼ねなく長期間滞在できることが必要になっていくのかなと思う。そのためには、人と人とのコミュニケーションがキーポイントになる。神崎郡は、姫路市の10分の1にも満たない人口規模なので、姫路を離して考えるわけにはいかない。姫路と郡部が交流し、阪神間からも、但馬からも、来てもらうことが観光の1つの材料になると思っている。

(委員)

中播磨地域の魅力は、山や川、海だけでなく、島もあり、自然に恵まれ、触れ合う機会が多いこと。それらがロケ地や観光地につながっているのは強みだと思う。

また、中播磨地域には4つの大学と1つの短大があり、数としては少なく感じるが、実は兵庫県立大学の9つあるキャンパスのうちの2つ、姫路工学キャンパスと姫路環境人間キャンパスがある。県内外から若い学生が姫路に来ることは、第2のふるさとに繋がるので期待できると思う。

課題は、中播磨地域には大きな災害がなかったので、自分の住む地域は大丈夫だという妙な過信がある人が多く、防災に関しての危機管理意識が割と低い地域であること。そのうえ、今年にはコロナがあり、自然災害と感染症との複合災害の備えについても考えていけないといけいないので、1人1人が正確な知識を持って、しっかりとした防災対策を講じることが必要ではないかと思う。

また、私はビジョンに関わって長いですが、大学生がビジョン委員として参加したのは2人だけと記憶している。2人は自発的に入って来たが、継続して次に繋がっていかない。今でも自分の住んでいる地域に目を向けて課題を考える教育のカリキュラムがあると思うが、もっと増やしてほしい。地域の良いところや課題を積極的に取り入れることで、自発的に地域活動に参加できる子に育っていき、それが自分たちの暮らす地域への愛着や、次世代に繋がっていくのではないかと思う。

(委員)

姫路市の総人口は平成27年度の53.6万人がピークで、人口推計では令和27年に46.2万人に減少する。自然増減の減少幅の拡大が人口減の一番大きな理由になっており、また社会増減でも姫路市外に出て行く人が結構多かった。以前は自然増減で社会増減を補っていたが、それが十数年の間に逆転したことは中播磨の課題だと思う。

また、独身世帯と高齢者の1人世帯である単独世帯が増加する見込みとなっているため、これを見守る地域づくりも課題だと思う。

小学校区の人口増減だが、人口の減り方は一律ではなく、JR沿線だけが人口が少し増加するような状況になっている。ある意味、コンパクトなまちづくりには繋がるのかなと思うが、姫路市の面積を考えた時にそれが正しい方向かは疑問であり、姫路市の総合計画でも、各地域にいろんな拠点を設けていく多核連携型都市構造、いわゆるコンパクト・プラス・ネットワークという形で考えていきたい。

まちづくりの課題としては、参考資料3「姫路市の概要」のP5に記載の6点が挙げられる。これまでの総合計画と新しい総合計画の策定で見てほしいところは推計人口。当時は合併前の姫路市だけで62万人を推計していたが、時代を経るごとに減少していき、今の総合計画では53万人、次の総合計画では、10年後に51.8万人を定住人口として目指している。

姫路市の魅力は、歴史文化資源が豊富で、姫路城や書写山圓教寺があるほか、今年にはコロナ禍で中止になったが、灘のけんか祭りに代表される播州秋祭りもある。これらは有形無形問わず、姫路が誇る文化財であり、これらを支える市民とともに未来に引き継ぐべきものと思っている。

(委員)

神河町のまちづくりビジョンは「ハートがふれあう住民自治のまち」と「大好き！私たちの町かみかわ」というタイトルを掲げてまちづくりを進めている。第2次長期総合計画では、「ハートがふれあう住民自治のまち」のタイトルのもと、「ハートが安らぐまちづくり」「ハートが賑わうまちづくり」「ハートが繋がるまちづくり」の3つの柱のもとに、まちづくりの基本目標を6つ掲げている。

神河町は県下で一番小さな町であり、現在、人口は1万1000人だが2060年には半分以下になるため、非常に厳しい状況だと思っている。総合戦略に記載の基本目標3や

基本目標2といった部分をメインに置きながら人口減対策を進めていきたい。

若者世代や子育て世代など、外へ出た人たちにUターンしてもらえるような、住宅取得の助成等をしてしながら住環境のフォローをしている。一時期、出生人数が40人台から70人台に回復したが、また少し下がりつつあるので、人口増は大きな課題だと思っている。

総合戦略会議では、コロナ禍の中でリモートやサテライトといった田舎でもやっていける環境を活用することで多くの人に田舎に目を向けてもらえるのではないかという意見も出ている。移住相談件数も昨年比で倍以上に増えてきており、空き家や廃校などをうまく活用することで、コロナ禍の中で新しい生活様式に基づいた田舎のすばらしさを打ち出していけないかと思っている。山林と農地が非常に多い町なので、山の活用は大きな課題であり、作った素材を燃やすバイオマス発電等ではなく、何とか材として活用していける方策がつかれないかという意見もある。

(委員)

市川町の魅力は、豊かな自然環境であり、この魅力を生かして産業振興や教育に取り組んでいる。リフレッシュパーク市川の自然を生かした遊びや学習、登山者が増加している笠形山の登山道の維持管理や駐車場の整備、市川の水辺をもっと身近に感じることができる環境整備の検討が主な特色のある取り組みである。次にゴルフアイアンの製造という伝統産業があることも魅力である。日本で初めて市川町でゴルフアイアンが製造され、現在もその技術が継承されており、町もそのPRに取り組んでいる。そして農産物が豊富で、野菜や花、米などを、多くの人が旬彩村などに出荷していることも魅力である。

市川町の主な課題はインフラ整備の遅れである。去年9月に実施した住民アンケートでは「重要度は高いが満足度が低い」ものに道路の改修や下水道の整備、公共交通の充実などの生活基盤の整備が上位に集中している。いくら自然環境が豊かで誇れる地場産業があると魅力をPRしても、そこで暮らす人が住みやすいと思えるまちなしなれば意味がないので、快適で住みよいまちづくりを進めることが一番重要であり、優先して取り組まなければならない課題であると考えている。

市川町では、総合的な計画を平成28年度から10年計画で策定している。基本計画は5年ごとに前期と後期に分けられており、現在、後期計画を作成しているところである。

「住民の絆を大切に元気で輝き誇れる“いちかわ”」をまちづくりの将来像とし、令和7年における将来人口を1万1100人に設定している。この目標とリンクさせ、まち・ひと・しごと創生総合戦略を策定しており、総合計画及び総合戦略の目標に基づいて、課題を解決しながら、快適で住みよいまちづくりを目指して市川町、そして、中播磨の魅力を高めていきたいと考えている。

(委員)

福崎町の魅力は住む・学ぶ・働くの3機能が調和のとれた町であることだと思う。8月3日発売のAERA増大号で、コロナ時代の移住先ランキングで福崎町は近畿で三重県の東員町と並んで同率の1位となっている。これは「広い家に住める街」、「大規模商業施設が充実した街」、「カルチャーを感じる施設がある街」、「将来伸びる街」、「子育てのしやすい街」、「治安のいい街」、「医療体制が充実した街」、「災害対応や行政サービスが期待できる街」のAERA独自の8つの指標を用いたランキングであり、コンパクトで住みよいまちという福崎町の魅力が、このような結果になったのではないかと思っている。

課題については、国においては地方創生、急激な少子高齢化の進展に対応、特に地方の人口減少の歯止め、東京への過度の人口集中を是正するということで、長期ビジョンや総合戦略を策定しているが、日本全体で見ても、2019年には人口自然減が50万人を超えており、合計特殊出生率は4年連続低下、出生数も4年連続で過去最少を更新している。東京一極集中についても、今年の1月1日現在の人口増加数と人口増加率ともに東京都が1位で歯止めがかかっておらず、地方創生等の施策が上手く機能しているとは言えない状況だと思っている。人口減少問題はもっと長期的な視点で問題をとらえ、収入面など地域に多少の格差があるにしても、誰もが生涯安心して暮らせる社会の仕組みができない限りは解決できないと思う。

福崎町の課題は、農業の担い手や新規就農者の確保、官民連携による文化財を活用した文化観光のまちづくり、空き家の利活用促進等がある。財政についても、コロナ禍でいろんな施策をしているが、交付金の減少がどれぐらいになるのか心配している。いずれにしても、地方創生やコロナ禍での行政運営、その他の事業をするにしても国や県からいろいろな交付金、補助金があるので、税金を含めそれらをいかに賢く使うか。それが持続可能な財政運営に繋がっていくので一番の課題だと考えている。

(委員)

私は社会学という分野でメディアやコミュニケーションを専門にしているが、その中で、1つの取り組みをどうやって宣伝し、大きなものにしていくかということを考えている。今この中播磨で一番注目しつつ、少し不安に思っているのが、文化コンベンションセンター周辺の投資開発がどういうふうに広がっていくのかということ。姫路市を中心に、周りを小規模自治体を取り囲んでいる都市構造の中で、中心を大きく発展させ、その力をいかに周辺に波及させていくかという取り組みだと思う。播但線や姫新線といった周辺の自治体の経済や社会文化交流にどう波及していくかがポイントではないかと思っている。1つの取り組みをどうやって他に波及させていくかということは、人口減少や、いろんなリソースが限られている中で、考えなければいけないやり方である。アクションする側の問題も、受け取る側の問題もあると思うが、上手く連動させていくことができれば良いと思う。ポテンシャルをどう広げていけるかが課題であると考えている。

(委員)

本日は、このビジョンを作成する上で大事なキーワードをいただけたと思っている。発言にもあったように、資料の中に県内の各地域ビジョンの記載があるが、ここから中播磨という言葉を取っても中播磨と分かるようなきらめく言葉が出たら良いなと思っている。我々は普段から見慣れた情報や慣例の中で生活しているので、新しいものを受け入れるのにどうしても躊躇してしまう。新ビジョンでは、メンバーが力を合わせて新しい価値観を作り出す必要がある。そういう意味で、今日配布された様々な統計や各市町で作られた総合計画の数字や言葉等はきちんと読み今後の中播磨の未来を展望せねばいけないのだと思う。

今後ともより有意義な情報交換ができればと思っているのでよろしくお願いします。